〈研究論文2〉

生物学と宗教的世界観

――西田幾多郎とJ・S・ホールデーンとの「収斂」をめぐって――

佐々木　慎　吾

一　問題の所在――西田とホールデーンとの関係をどう捉えるのか

西田哲学研究が活況を呈する近年の状況にあって、とりわけ筆者の目を惹くのが、西田における「生命」概念を切り口としたアプローチによる研究の動向である。こうした生命概念への着目には、科学技術の発展に伴う生命をめぐるさまざまな問題状況や、新しい生命科学の興隆といった外的な事柄も幾分かは影響していよう。しかしながら、外的事情は差し当たっては措くとしても、生命をめぐる思索が西田にとって最も重要な哲学的課題の一つであったことは疑いない。

その際注目すべきなのは、西田の生命論において、英国の生理学者にして特異な全体論的生命哲学の提唱者、ホールデーン(John Scott HALDANE, 一八六〇～一九三六)の名が頻繁に引き合いに出されていることである。西田はホールデーンの著書『生物学の哲学的基礎』からしばしば引用しつつ、独自の生命論を展開している。主体と環境との相互形成という問題や、歴史的世界にも適用される「種」の概念は、ホールデーンからの重大な影響の下に形成されたと考えねばならない。[1] ところで、きわめて興味深いことには、そのホールデーン自身が、経験的な生理学の研究を超えて全体論的・有機体論的な生命哲学を唱え、ついにはかかる哲学に基づく独自の宗教的世界観を提示するに至った人物なのである。

ホールデーンの宗教的世界観は、上記『生物学の哲学的基礎』のほか、西田が言及していない『一生物学者の哲学』[2]なる著作にも示されている。彼の宗教的世界観には、無論キリスト教を背景

とすることによる違いこそあれ、西田のそれと相通じる部分が少なくない。場合によってはきわめて類似の見解を表明している箇所すら散見されるのだ。

しかしここで注意しなくてはならぬのは、西田がホールデーンに着目するのはあくまで有機体と環境との整合的・能動的維持活動の全体という、独自の全体論的「生命」概念の導出に関してであって、ホールデーンの宗教的世界観には全く触れていないという事実だ。筆者は、このことの背景には、西田がホールデーンの著作の全体を読まないまま一部分のみを援用したのだという事情があると推測している。すなわち、西田はホールデーンが自分同様に宗教的なるものに関心を抱き、自然科学の上に宗教的世界観を確立しようとした人物であることを知らなかった可能性が高い。西田のように宗教的なるものへの強い志向を有する哲学者が、ホールデーンの生命論にのみ言及して、その宗教的議論については読んでおきながら素通りするというのは、いかにも不自然だからである。言うまでもなくホールデーンが西田の哲学的な仕事に通暁していたという可能性は皆無であるから、宗教をめぐる思索に関しては、両者の間に影響関係を想定することはできない。[3]

にも拘わらず、結果として両者の宗教的なるものをめぐる思索に類似性を見いだしうるという事実にこそ着目すべきではないか。西田がその生命哲学を彫琢するにあたってホールデーンから強いインスピレーションを受けたのは、そこにみずからの哲学と呼応しうる何かを感得したからに違いあるまい（18：554）。無論、彼ら二人は文化的・宗教的な背景が異なるばかりでなく、一方は内的な宗教経験を徹底した哲学的思索によって論理化しようとした哲学者、他方は一貫して実験とフィールドワークとを実践した実証主義的科学者であった。だとすれば彼らは、全く異なった地点から出発し、異なった経路をたどりつつ、類似の宗教的世界観へといわば「収斂」したことになる。以下、本稿ではホールデーンが、経験科学としての生物学と宗教的世界観との間をいかにして架橋したのか、そしてそれが西田の世界観といかなる点で相触れるものであるのかを明らかにしたい。

二　西田哲学と生命論の現在

ここで、西田とホールデーンとの関連について扱った先行研究について簡単に紹介しておく。筆者の知る限り、もともと西田哲学におけるホールデーンからの影響を論じた研究はそれほど多くはないのだが、それらの中には全体論的生命観に関して述べたり今日の自己組織化やシステムの理論といった生命研究の諸潮流との関連を論じたりしたものはあっても、ホールデーンの宗教的世界観について触れたものは皆無である。[4]

野家啓一は現代の生命科学に広く目配りしつつ西田の「形」の哲学について論じ、「形の自己限定」の論理こそが歴史的生命の論理だとする（野家1996：35-6）。野家にはまた、同時代の生命

をめぐる諸潮流との関わりについての研究もある（野家2002）。森本聡は西田の生命論に対するホールデーンからの影響を詳しく論じており（森本1998）、また別の論文では野家の議論が現代の諸科学と西田哲学との表面的な類似性を指摘しているに過ぎないと批判する（森本1999）。浅見洋は、森本の批判に同意しつつ、西田の生命論の根底にある「宗教的覚悟において自得された宗教的生命観（浅見：90）」に着目し、いたずらに現代科学との共通点を云々するよりも、宗教的生命観を掘り下げて行くことこそが、現代における西田哲学のアクチュアリティを産み出すのだと主張する。いずれの論者も、それぞれ違った角度から西田の生命論とホールデーンとの関係について興味深い議論を行っているが、ホールデーンの宗教的側面が全く考慮されていない憾みがある。

例えば浅見は、西田の哲学的生命論は「宗教経験によって自得された宗教的生命観を起点とし」つつ、「西洋哲学の諸思想や現代生物学の成果と対話させながら、対話の対象をも包むような」性格を持っていると述べる（浅見：97）。西田の生命論の根底にある宗教的生命観を重視すべきだとの指摘は的確だ。しかし、あたかも西田が、宗教的な要素を持たぬような厳密な科学理論としての生物学の諸成果を「宗教経験によって自得された宗教的生命観」によって包摂・消化しつつ、自己の体系を構築したかのように考えるならば、全くの誤りとは言わないが、いささか正確さを欠くと言わざるをえない。なぜならば野家が指摘するように（野家：22）、西田が受容したのは、呼吸生理学者としてのホールデーンの具体的・実証的な研究成果というよりはむしろ、いわば科学者としての経験を通じ自得された哲学的な生命観だからである。西田とホールデーンとの「対話」とは、決してこれまで考えられてきたような、宗教的・哲学的世界観と自然科学との対話ではなく、むしろ各々異なった相において経験され自得された二つの宗教的・哲学的世界観の間で、そうとは気づかれることなく交わされた（交わされかけた）対話だったのである。

それでは節を改めて、ホールデーンの宗教的世界観について検討することにしよう。

三　ホールデーンの宗教的世界観

①「生命」の具体的把握

まず指摘しなくてはならぬのは、ホールデーンの宗教的世界観が科学者としての彼の実践と密接に関わるものであったということだ。科学研究を生業としていた者が一方においてたまたま信心深い人物であったという類のものでは決してなかったのである。

彼は呼吸生理の研究を専門としていたが、積極的にフィールドへ出る実証的科学者であった。ホールデーンは鉱山における労働条件の調査や海軍の潜水実験にしばしば赴いている。ホールデーンが相手にしていたのは常にこうした具体的な自然であり、また具体的な生命だったのだ。

ホールデーンは、有機体が血中の酸素濃度といった「内的環境」を制御しうるようなメカニズムに関心を抱いていた。こうした探究において彼が見いだしたのは、各々の有機体とその環境との間に能動的に維持されている特殊な整合的構造であり、それが単純な作用・反作用の法則では決して律しえないような特性を持つという事実である。西田に影響を与えた生物学の「公理」、すなわち「この能動的維持とは我々が生命と呼ぶものであり、それを知覚することが生命を知覚することである。それゆえ、生命そのものの存在が、科学的生物学の依拠する公理なのである（Basis: 18）」とは、生理学者ホールデーンが常にそこから出発し、そこに立ち返るべき、最も基礎的な生命の事実なのである。

②重層的世界像と人格的世界

このように、生理学者ホールデーンにとっての疑いえない出発点とは、「生命」の存在であり、またそれをわれわれが知覚しうるという経験の事実だ。われわれは、各々の有機体を、そこに「生命」が具体的に顕現（manifestation）しているものとして知覚する。その場合すでに「経験それ自体を非物理学的に解釈しているのであり、この経験を覆っている固有の統一性としての生命の概念の下に、経験を生物学的に解釈している（Basis: 42）」ことになる。われわれは有機体において、部分と部分、部分と全体との関係を見いだし、またそれらの能動的維持を見いだすが、それらは必ず全体的生命の一表現として知覚される。とは言えこのような「知覚」の経験が、われわれから孤立して存在する「対象」の単なる像を受け取るということを意味するのでは決してない。生命が、単なる物理的実体としての有機体としてではなく、その内的・外的な環境との間における能動的な整合性維持機能の全体を通じて表現されるように、われわれの知覚という経験もまた、知覚するわれわれの関心が対象との間に取り結んでいるさまざまな時間的・空間的関係を整合的に維持する過程の全体を通じて表現されるものなのである。知覚される世界とは、「過去と未来が現在において現前しうるために、過去に遡りまた未来へとわたって届いているような、われわれの人格的関心の具現化（embodiment）（Basis: 100）」である。

物理的世界、生物学的世界を包含するような、こうした関心の世界は意識的な経験の世界であり、「われわれの経験の全体を覆っている（Biologist: 79）」とホールデーンは主張する。過去と未来は「今ここ（here and now）」という表現点において具現化する。そしてそれは、「『心』と呼ばれる抽象的で架空の統一体ではなく、具体的な人格（Biologist: 81）」においてなのだ。ホールデーンの言う「人格」とは、心理学において対象化されるような抽象的なものではなく、むしろそこにおいて諸関心の整合的維持作用の全体が表現され、また「その具体的な環境の全てを含んでいる（Biologist: 113）」ような、言わば具体的な場なので

ある。

③知覚と行為との相即

そこで、知覚はわれわれの関心、意志と切り離して考えることができない（cf. Basis: 101, Biologist: 122）。われわれの人格的関心が表現されるのは意志的な行為（voluntary action）においてであるからだ。「知覚されたものは、動機的または動機づけられた性格を有しており、知覚から切り離された意志的行為は意味を欠いている。人格は、意志と知覚の双方を覆って広がっており、意志における正しさまたは善さ（right or good）の概念は、知覚における真の概念に相即している（Biologist: 122）」。人格的世界が意志的行為の世界であるならば、諸々の行為がその環境との間に取り結んでいる全体的関心の整合的な維持というものが考えられ、その統一性の顕現が、単なる個人的関心を超えているような、共同生活における真・善・美の認識である（Basis: 115-6）。

絵画のような芸術作品や、花のような有機体の「美」をわれわれが知覚するのは、それを物理的対象として把握し、色を分解したり、形態を数学的に分析したりすることを通じてではあるまい。むしろ美とは対象に本来備わっている「整合的な全体（wholeness）」を把握することで知覚されるのであり、美に関わる具体的行為、そしてそこで具現化している人格的関心が、「美」という全体のもとに整合的・継続的に維持されなくてはならないのである。そしてそれは真、善の場合にも同様だとホールデーンは考えている。[5]

ホールデーンにとって具体的な経験の世界とは、知覚と行為とが相即するような歴史的な（＝現在において過去・未来を伴う）行為の世界であり、その整合的な統一は、行為を規定し、導いている共同的な真・善・美によって継続的に維持されているのである。

④全てを包括する人格性としての「神」

ホールデーンは「宗教」を、経験に基づかない単なる神学的教条の寄せ集めではなく、現実における人間の経験の総体に浸透し、それを満たしているような普遍的かつ包括的な相だと考えている。そしてこうした経験の場である人格の全てを包含するような（all embracing）人格性こそが、ホールデーンの言う「神」にほかならない（Basis: 116）。

人格的関心の世界の統一を維持している真・善・美の理念は、「明白な宗教的信念の形式が無い場合にも保持される（Biologist: 111）」。つまり、宗教はそれが顕在的に宗教であると認識されているか否かに拘わらず、あらゆる経験において「われわれが知覚と行為においてこれらの経験の客観的側面を感得する限りで（Basis: 115）」われわれ自身の中に浸透してくる。真・善・美の

具体的経験を欠いた教条の寄せ集めは、歴史的・人類学的意義を持ちうるにせよ、宗教そのものとは言えず、逆に誰かがそのような形式を無視・拒絶する場合でも、その経験の総体は「宗教によって満たされうる（同）」のである。

ホールデーンにとって人格とは、そこにおいて諸関心の整合的維持作用の全体が表現されるような場であった。全てを包含する統一性としての神は、したがって諸人格性の人格性（the Personality of personalities）であり、あらゆる人格的関心がそこにおいてみずからの統一を見いだすような具体的環境の全てを抱懐した「自己一貫的（self-consistent）なリアリティ（Biologist: 119）」である。だから、ホールデーンの「神とは人格性である」との言明は、いわゆる人格神論を唱えているというわけではない。ホールデーンの神はまた、現実の世界の道徳的完全さを要請するのでもない。神は経験の世界におけるあらゆる無知、罪業、苦難から切り離されているという意味での「完全な存在」ではない。そのような考えは皮相・不完全な神学であり、「このような宗教形式を科学者はかえって受け入れない（Basis: 142）」。むしろこの宇宙は、神の段階的な顕現なのであり、それを自覚することこそが「宗教」と呼ばれるものなのだ。

四　比較と展望——結びにかえて

これまでの論述で明らかなように、ホールデーンは生理学の実践をつうじてみずからが感得した「生命の公理」という地盤から一歩も離れることなく、独自の宗教的世界観に至っている。そして、にも拘らず、思弁的哲学者たる西田の宗教的世界観と結果的に相触れる地点へと「収斂」したということが、非常に興味深いところなのである。経験の場である人格の全てを包含するような人格性という神の概念は、まさに「場所的」と呼ぶに相応しい内実を持っているし、知覚と行為とが相即するようなホールデーンの人格的世界は「行為的直観」の世界と言い換えることもできるだろう。[6] 無論、概念や論述の表面的類似だけではない。筆者の見るところ、強く注目すべきなのは、両者の哲学が共に、具体的「生命」の経験において自得された「具体性の哲学」であることだ。

「宗教は心霊上の事実である。哲学者が自己の体系の上から宗教を捏造すべきでない（11：371）」との言葉に表れているごとく、西田はあくまで自己の内面の宗教的経験という事実に拠って、そこから離れることなく、宗教的なるものの深い根底を探り当てようとした。そしてその際、ホールデーンの生命論を、創造的世界の自己維持的・自己産出的構造に援用しうるものとして摂取したのである。西田にとって「生命」とは、経験の基底にあって、そこにおいて言わば具体性の論理が作動するような場所であった。「具体的真理は具体的生命の立場から考えられるものでなければならない（8：269）」のである。

他方ホールデーンの出発点は、われわれが経験において具体的な「生命」の全体性を、分析的思惟によってではなしに感得できるという事実である。彼を宗教的世界観の高みにまで導いた動機の一つは、おそらく全体性を自己維持する生命体のメカニズムの複雑精緻さへの驚嘆の念であったろう。仮にこうした「生命」への志向性を、西田の内的方向に対比させて外的方向と特徴づけるなら、真に具体的な生命的世界は、これら両方向の統一という相のもとで把握されるべきであろう。

近時、いわゆる「環境倫理」や「生命倫理」の文脈において西田哲学を読もうとする試みがある。西田の生命論から何かしらの今日的ヒントを見いだそうとする意図そのものを否定するつもりはない。注意が必要なのは、西田における「生命」があくまで自己の内面において探り当てられたものであることだ。西田は数学や物理学の抽象的な議論は積極的におこなう一方、（科学としての）生物学へは殆ど関心を払った形跡がない。西田哲学を真に今日的な意味で生かすためには、内的方向に傾きがちな生命概念に対して、外的方向からの何らかの補完が必要だろう。こうした意味において、西田とホールデーンとの真の対話がなされることがなかったのは残念なことだった。しかし、ここから先はむしろ現代に生きるわれわれが引き受けるべき課題である筈だ。

（1）筆者は別稿において、西田がホールデーン由来のものとして述べる生物学的議論に、ホールデーン自身の見解とは相違する、生物学的に不適切な解釈があると指摘した。その概略を述べるならば、呼吸生理学者としてのホールデーンが、あくまで個々に観察されうる有機体がそなえる自己維持の機能に着目していたのに対し、西田はそれを「種」の問題だと誤読し、結果として、行為の範型としての自己維持する「種の形（＝国体）」をめぐる不適切な議論へと導かれてしまったということである。佐々木を参照。

（2）以下『基礎』、『生物学者』とそれぞれ略記する。また頁数を指示する際はBasis、Biologistの略号を用いて、（Basis: 15）のごとく記す。

（3）西田は一九三六年の初頭に高山岩男から『基礎』を借りていることに注目した野家啓一は「同じ年の七月に『思想』に発表された『論理と生命』にはすでにホールデーンに対する明示的な言及がなされていることからすれば、驚くべき吸収の早さ（野家1996：22）」だと評価している。しかしながら、結局西田は三年もの間この本を入手できなかったのである。一九三八年一二月二二日付けの西谷啓治（滞独中）宛書簡において、西田はホールデーンの著書が英国にて絶版だったと告げ、独訳の購入を依頼している（19:57, 64）。西田がようやく『基礎』の独訳版を入手したのは、翌一九三九年二月のことだ。独訳入手までの期間にもホールデーンへの頻繁な言及はなされているわけだが、その間ホールデーンのテキストは西田の手元には無かった可能性がある。高山から『基礎』を借りていたのは、全体を十分詳細に読むことができぬほどの短期間だったのではないかと推測されるのだ。ホールデーンへの言及が『基礎』冒頭部の特定の箇所からのみであることも補強材料となろう。

無論これはあくまで推測であり、西田が『基礎』の全体に目を通

していた可能性は残る。しかしその場合、ホールデーンの生物学的議論に共感、触発された一方で、西田にとって関心が深いはずの宗教的議論について触れていないことの説明ができない。また、『基礎』の前半部の生物学的議論についても、注意深く読むならばホールデーンが「種」の議論などしていないということは明白である。例えば（Basis: 21-2）を参照。これらを総合的に考慮すれば、本稿の「収斂仮説」には十分な説得力がある。

（4）直接西田と関連する記述ではないが、夙に田辺元が、「哲学と科学との間（一九三七）」においてホールデーンを取り上げている。次節の内容を先取る形になるが、興味深い箇所なので引いておく。そこで田辺はホールデーンの生命論を解説した上で、その宗教的世界観について次のように評する。すなわち、全体重視の傾向は生物学主義に基づく唯心論的世界観の哲学に帰着せざるをえない。「特にホルデーンの場合には哲学を積極的に標榜し、其体系を完結させるために、物理学、生物学、心理学の上に、直接体験せられる知覚世界を最も深く最も具体的に解釈するものとして宗教を置き、超個人的理想的人格としての神に全体が包摂せられ、世界は神性の不断なる自己開示の発展過程と解するのである（田辺：226-7）」。かかる世界観に対する田辺の批判は、人格的世界（心理学的に解釈された世界）と、全てを包摂する宗教的世界との間に、それらを媒介する、具体的な社会（＝種）が欠けているという点にある（同：229以下）。

（5）明らかに、ホールデーンの「美」についての議論はカント『判断力批判』の影響を受けている。『判断力批判』が美と生命の問題とを主題としていることを考えると、生物学者たるホールデーンのこのスタンスは注目に値しよう。

（6）紙幅の関係でもはや詳述はできないが、例えば『善の研究』における純粋経験の統一としての神をめぐる議論（1：189以下）と比較せよ。また晩年の「場所的論理と宗教的世界観」において「万有在神論的（11：399）」と呼ぶ西田の立場は、ホールデーンと共通のものがあると考える。

参考文献

ホールデーンの著作については注(2)のごとく示し、西田幾多郎の著作については、岩波書店版『全集（旧版）』に従って（巻数：頁数）のごとく示した。

HALDANE J.S.（一九三一）*The Philosophical Basis of Biology*, Hodder and Stoughton

（一九三五）*The Philosophy of a Biologist*, Oxford Univ. Press

浅見　洋　（二〇〇一）「西田における生命論の宗教的背景とその展開」『比較思想研究』第二八号　所収

佐々木慎吾　（二〇〇五）「西田幾多郎における種の概念の問題性」『西田哲学会年報』第二号　所収

田辺　元　『田辺元全集』　第五巻　筑摩書房

野家啓一　（一九九六）「歴史的生命の論理」『生命の思索』中村雄二郎・木村敏監修　哲学書房　所収

（二〇〇二）「主体と環境の生命論」『日本の哲学』第三号　昭和堂　所収

森本　聡　（一九九八）「後期西田哲学における生命論とJ・S・ホールデーン」『宗教哲学研究』第一五号　所収

（一九九九）「現今の生命論的西田哲学批判」『大阪経済

大学教養部紀要』第一七号　所収

（ささき・しんご、倫理学、東京大学大学院）